OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「こそ」と已然形 : 枕草子跋文考補遺
Author(s)	林, 和比古
Citation	語文. 1957, 19, p. 35-38
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68513
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「こそ」と已然形

——枕草子跋文考補遺——

林和比古

一

大阪大学南北校研究論集第四輯（昭和三一年三月刊）において、筆者は従来一般に

「……歌などをも木草鳥虫をもいひ出だしたらばこそ、思ふほどよりはわろし心見えなりとそしられめ」（枕草子跋文、三巻本ニヨル）

と句読せられてゐた文を解体して、

「おほかたこれは世のなかにおかしきこと人のめでたしなど思ふべきことをえりいでて、歌などをも木草鳥虫をもいひ出だしたらばこそ。」

「思ふほどよりはわろし、心見えなりとそしられめ、ただ心ひとつにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、ものに立ちまじり、人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、はづかしきなんどもぞ見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞある。」

の二文に切った。

前の文の「未然形＋ばこそ」の文法についてはいくつかの例をあげ、「この文法は現代人でも少し年配の人は知ってゐるであらう。平安朝から一千年間脈々と生き続けてゐるのである」と述べた。その後現代では次の様な例を見つけたから報告しておく。

○やがて二十余人のお坊さんがいっせいに読経をはじめたが、最愛の子、兄妹を血まみれの修学旅行の犠牲にした遺族たちにとっては、こんな空虚な飾り、折角の朗々の念仏も、目にも耳にも入らばこそ「遺体の頭はこちらです」と案内の声も上の空でにらみつけるような目、目、目が遺体のフタに吸いついてゆく……。

（大阪朝日新聞昭和三一・一〇・一七水曜朝刊三面、句読モ原文ノママ）

「入らばこそ。」で筆者は句点。をつけ、切れる様に説いたが、右の記事では句点も読点もつけず、次句へ気持がかゝってゆく様な遣ひ方である。文末に「こそ」の来たときは、かやうに切ってもよし、切らなくてもよし、微かな気持のつながりを感じることが多い。しかしその事と、「山こそ高けれ」の様に文の二成分として切っても切れない関係にあるのとは別である。こゝの「未然形＋ばこ

そ」の用法は文の成分として必ず続くといふ様な続き方ではないといふ事を述べたわけである。

西鶴から一例ひく。

○よる所さはる所にて取ひしがれ、財室ざらりと埒明けて、むかしの風俗四五年にかはりて、今は小谷といへる比丘尼寺のほとりに裏屋住ひして、いかな〳〵硯箱がひとつあらばこそ、ちんからりにかけ釜かけて、汗なしの食をたき、有る時は餅に日を暮し、ない時は帯しめて、三日大こんも腹ふくるゝたよりと、おのづから常精進の身となれり。（置土産巻一の三、偽もいひすごして。岩波文庫版二八頁）

片岡良一氏は「あらばこそ、」と読点を加へられたが、やはり次に続くといふ気持がいくらかあるからであらう。

○武蔵の国の住人、畠山の庄司次郎重忠、生年廿一になりけるが進み出でて申しけるは、「此の川の御沙汰は、鎌倉にても能能候ひしぞかし。日来知ろしめされぬ海川の俄かに出で来ても候はばこそ。此の川は近江の湖の末なれば、待つとも待つとも水旱まじ。……」（平家物語巻九、宇治川、日本古典全書、中ノ一六二頁）

冨倉徳次郎氏の句読では。になってゐる。次の文章と気持の上でいちおう関係がないと思はれたからであらう。尤である。

かやうに「未然形＋ばこそ」の意味は気持の上で微かに次に続いてゆく場合もあるが、切れると考へても差支へがないのである。これは王朝の例でも同じことがいへる。

二

さて前文はいちおう解決したが、次は後文である。

「思ふほどよりはわろし、心見えなりとそしられめ、ただ心ひとつにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、ものに立ちまじり人なみなみなるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしにはづかしきなんどもぞ見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞある。」

前に「こそ」があれば「……そしられめ」と已然形で受ける事が常識であるが、「こそ」と切離したいま、「……そしられめ」と已然形にする事は不合理ではないかといふ問題が生じる。

（この点についてかつて学生雉本淳子氏の質問を受け、拙稿の不備を補ったことであった。本稿はそれを補訂したものである。）

この問題については昭和卅一年、「解釈と鑑賞」に大野晋氏の明快な研究が連載され、同氏によって石田春昭氏のかつての畏敬すべき研究が改めて紹介され、（コソケレ形式の本義―国語と国文学昭和十四年二月号三月号）筆者の記述を俟つまでもないことになったが、これら諸家の用例は古代前期のものが多いから、筆者に残された仕事としては、枕草子やその同時代の作品にもまたこの現象があり、「心見えなりとそしられめ」もその一つのあらはれであることを検索すればよいことになった。

× ×

石田春昭氏は已然形の用法を次の様にあげられた。

一、助詞の助けを借らず単独で前提となること

二、下に接続助詞のバ、ド（ドモ）を従へて前提となること

三、下に係助詞のヤ、カ、ゾまたはコソを従へて前提となること

四、下にハを従へて逆接前提となること

五、下にヤを従へて反語となること

六、疑問詞に呼応すること

七、コソに呼応すること

右のうち、いま問題になるのは「一、助詞の助けを借らず単独で前提となる」場合である。参考のためにその中から一例引用すると

（一）已然形が単独で前提となるもの

（イ）順接前提

○引き放つ矢の繁けく、大雪の乱れて来礼（キタレ）、まつろはず立ち向ひしも、露霜の消なば消ぬべく、……（万葉、一九九）

（引き放つ矢の繁きことは、大雪のやうに乱れて来れば、服従しないで……万葉集全註釈ニヨル）

（ロ）逆接前提

○ふなつきなどとは申せ、ふねつきと申すことはござるまい。（狂言記、舟ふな）

（ロ）の例は狂言記のもので、余りに時代が下りすぎるが、石田氏のひかれた例（大船を荒海に榜ぎ出で八船多気、わが見し児らが目みはしるしも。（万葉集一二六六）は逆接順接両説あって分明でなく、他に古代の例がひかれてゐないから、明白な狂言記の例によることにする。

これが枕草子には次のやうにあらはれてゐる。

○（三巻本）すこしとしなどのよろしき程はかやうのつみえがたのことはかき出けめ、今はつみいとおそろし。（三一段説教の講師）

（もう少し年の若いころならば、このやうな罰当りの事をば書いたであらうが、今となっては罪障のほどがいかにも恐ろしい）

右の例は三巻本第二類にはすべてかうあって係助詞「こそ」がないにもかゝはらず「かき出けめ」と已然形で結ばれ、それが逆接前提となってゐる。（三巻本第一類本ハ欠巻）

たゞし他の諸本では「こそ」があらはれてゐる。

○（能因本）少年などのよろしきほどこそかやうのつみえがたの事もかきけめいまはいとおそろし

○（前田本）すこし年などのよろしきほどこそかやうのつみえがたの事もかきをけは、いまはいとおそろし（をけはハ出けめノ誤字デナイカト思ハレル）

○（堺本）わかき時こそかやうのつみふかき事もよかりしかおいてはいとおそろし

他の三本の例は「こそ」を伴った使ひ方で、三巻本に「こそ」のないのは書写に際しての不注意の誤写だと考へられるかもしれないが、筆者は必ずしもさうは考へない。もちろん不注意の誤写も多いが、意識的の使用もある。「こそ」を使はないこの場合などは作者または後人（作者を去ること遠くない後人）の意識的な使用と考へてよいであらう。

○（能因本）身をかへたらん人はかくやあらんとみゆる物は……ざうしきの蔵人になりたる。こぞ霜月のりんじのまつりにみこともたりし人とも見えず、君だちにつれたちてありくはいづくなりし人ぞとこそおぼゆれ。ほかよりなりたるなどは、おなじ事なれ、いとさしもおぼえず。（校本二四二段身をかへたらん人は）

（他の身分から蔵人になった者などは（所雑色から蔵人になったのと）同じ事の筈であるが、ほんとにそれほどはえ〳〵

しくない。〕

右のように三条西家本では「こそ」がなくて逆接前提の已然形が単独で使はれてゐる。尤も他の諸本殊に同系の能因系他本では「なれど」となっていて、これは「なれど」の誤写と考えるべきかも分らない。

○（三巻本）ほかよりなりたるなどは、いとさしもおぼえず
○（前田本）ほかよりなりたるは、をなじことなれど、さしもおぼえず
○（能因本他本）ほかよりなりたるなどはおなじことなれど、いとさしもおぼえず
○（堺本）該当句ナシ

× ×

跋文の「心見えなりとそしられめ」のやうに諸本通じて「こそ」を伴はない例は未だ見当らないが、万葉時代のやうな已然形単独使用は平安朝に於ては激減したとはいへ、なほかつ〳〵見受けられるといってよからう。現代の文語でも口語でも時々使はれることがある。（註）

そこで跋文のこの個所は次のやうに訳し得ると結論するわけである。

「思ふほどよりはわろし、心見えなりとそしられめ、ただ心ひとつにおのづから思ふことをたはぶれに書きつけたれば、ものに立ちまじり人なみなみなるべきものかはと思ひしに、はづかしきなんどもぞ見る人はしたまふなれば、いとあやしうぞある。

【訳】「枕草子は予期してゐた程よりはまづい、あさはかである」とそしられるかもしれないが、私（清少）はたゞ自分の心だけにたまさか思い浮んだことを冗談半分に書きつけた本であるから、他の書物に伍しては、とても一人前の評判を得られようなどと思ってゐなかったのであるが、「すばらしい出来だ」などと読者がおっしゃって下さるので、ほんとに狐につままれたようです。

これではっきりと筋の通った跋文になったと私は思ってゐる。

註〔与謝野晶子、君死にたまふことなかれ――君死にたまふことなかれ、すめらみことは戦ひに、おほみづからは出でまさね、かたみに人の血を流し、獣の道に死ねよとは、死ぬるを人のほまれとは、大みこゝろの深ければ、もとよりいかで思されむ。〕

――大阪大学助教授――